

平成24年度土木学会中部支部調査研究委員会事業報告書 －地域の歴史・教訓に減災を学ぶ調査研究委員会－

1. メンバー

委員長	辻本 哲郎	名古屋大学大学院 教授	河川工学
委員	秀島 栄三	名古屋工業大学大学院 教授	土木計画学
委員	牛山 素行	静岡大学防災総合センター 准教授	防災工学
委員	竹内 礼子	駿府静岡歴史楽会	郷土史
委員	新目 真紀	名古屋工業大学大学院博士課程学生	土木計画学
(以下、年度途中から参加)			
委員	高山 純一	金沢大学理工研究域教授	土木計画学
委員	溝口 敦子	名城大学理工学部 准教授	河川工学
委員	宮島 昌克	金沢大学理工研究域教授	地震工学

2. 研究の背景と目的

土木工学は、土木施設が有する災害を防御あるいは制御する機能を向上させることを中心に減災に取り組んできた。しかしながら、それらをもって巨大災害による損失を完全に抑えることはできない。地域の様々な災害リスクと固有の環境条件に的確に把握し、社会が発災に最良な形で対応するために、災害体験に基づく教訓、ものの謂われ、土地の命名などに学び、それらを今後に活かすことは、どのような時代にあっても有効であり、これまでも実践されてきている。

本委員会では、改めて地域の歴史・教訓に学ぶことでどれだけ減災効果を向上させることができるかを見込まれるかを洗い出す。将来的には、それらの知見や取り組みを土木整備にどれだけ反映させることができるか、その効果と可能性を明らかにしていく予定である。

3. 活動内容

本調査委員会は、基本的に土木学会中部支部タスクフォースと連携しながら以下の活動を行った。

1) 中部支部タスクフォースの全体会議・打ち合わせへの参加

(2012年4月, 7月, 10月, 2月)

5回の打ち合わせの中で、まず、災害の連鎖、各所の連携をキーワードに、過去の災害と自然条件、社会条件との関わり、さらには、その災害で生じた被害についての関連を整理している。同時に、過去の災害を参考に、想定されているスーパー伊勢湾台風、南海トラフ巨大地震、鳶山崩れに対象災害を絞り、災害時の事象、各所の連携を時系列で整理し始めている。なお、本調査委員会は、この時系列整理のうち、過去の事例を組み込むことを視野に入れ災害事例の情報収集の役割を果たしている。

2) 現地視察「歴史的大津波の爪痕と防災まちづくりをたずねて」の実施【参考資料1-1, 2】
(2012年12月14日)

訪問先: 三重県大紀町錦, 紀北町紀伊長島(仏光寺), 鳥羽市国崎町(常福寺)

土木学会中部支部タスクフォースと連携してバスツアーを企画し, 津波対応が進んでいる大紀町錦地区, 宝永地震の記録として宝永碑文が残る仏光寺, 日本初の高台移転を実施した集落にある常福寺を訪ねた。

大紀町錦地区では, 東南海地震で津波に襲われた経験を持つ市長のまちづくりへの思いやまちの歴史などを聞くとともに, 対策施設とまちの現状を視察した。仏光寺では, 紀北町と大紀町錦の現状を比較しながら寺の周辺の街並みを散策し, 碑を訪ねた。また, 常福寺では住職に話を伺い, 昔ながらの言い伝えなどについて学ぶとともにまちの現状を視察した。こうした取り組みを通じ多分野からの参加メンバーの意見を聞き本委員会活動に役立てた。

3) 現地視察「～鳶山大崩壊の歴史を学ぶ～」の実施【参考資料2】

(平成25年1月14日, 15日)

土砂災害として鳶山大崩壊について学ぶべく, 立山カルデラ博物館を訪れ資料収集と富山平野の視察を行った。鳶山崩れに関わる資料を収集し, 博物館で得た情報から, 鳶山崩れ後の富山平野での災害を時系列で整理し, 土砂災害のシナリオを作成するべく資料に基づく事象の整理を行った。

参考資料1-1: 現地視察「～歴史的大津波の爪痕と防災まちづくりをたずねて～」実施報告書

参考資料1-2: 現地視察に関わる資料

参考資料2: 鳶山崩れ関連資料 越中立山大鳶崩れ抜粋

4. 研究の成果と今後の展望

申請当初, 以下のステップで検討予定であった。

- (1) 土木分野内外双方の関係者が参加して, 地域の歴史を理解するプロセスのあり方を考察する。
- (2) この地域における災害, 今後起こりうる災害に向けた計画や施策を対象とし, 地域の歴史や教訓がどれだけ反映させることができているかを検証する。
- (3) 東日本大震災を受けて各方面で見直し立案されている防災計画と当委員会の検討結果を対比することで, 歴史や教訓を施策に反映させる。

これに対し, 今年度は, (1)(2)として, 他分野の委員が参加し, 南海トラフ巨大地震に対する三重県の津波防災に関連する計画や施策の調査検証, 鳶山崩れによる富山県の土砂災害の災害資料収集とあわせて議論するとともに, 4回の打ち合わせを実施した。こうした活動を通じ, 巨大地震災害, 高潮洪水災害, 土砂災害のシナリオをまとめることができた。

一年間では, (3)まで活動が到達せず継続申請を決めたが, 今後は, 作業をさらに進め, 本委員会が歴史的教訓などを学んだ上で災害シナリオを描くことで, 現在想定されている被害に対する防災計画がどこまでそのシナリオに対応しているのか対比でき, より有効な防災対策へつながることが期待される。

以上